

臨床実習客観的臨床能力試験
(objective structured clinical examination ; OSCE)
における評価者について

1. 臨床実習に関する客観的臨床能力試験 (OSCE) について

下記に示す臨床実習前と臨床実習終了後の2つの部分からなっている。

① 臨床実習前客観的臨床能力試験 (Pre-CC OSCE)

診療参加型臨床実習 (clinical clerkship) において、各医学生が医行為の実施を許容できるだけの臨床能力を修得しているかを評価する試験 (CBT で知識レベルを測定し、OSCE で技能と態度のレベルを測定する)

対象学年：臨床実習開始前 (多くは医学部4年生)

内容：医療面接、頭頸部診察、胸部診察、腹部診察、神経診察、四肢と脊柱、基本手技、救急の各部に分かれた課題についての診察技能を評価

評価者：実施大学の教員と、評価者認定のための講習会に出席して評価者資格を修得した他大学の教員

② 臨床実習後客観的臨床能力試験 (Post- CC OSCE)

診療参加型臨床実習 (clinical clerkship) により、医学部を卒業させてよいレベル、すなわち卒後臨床研修を開始させてよいレベルの臨床能力を、医学部6年生が具有しているかを評価する試験

対象学年：6年生 (卒業前)

内容：ある症候 (モデル・コア・カリキュラムのFの項目にある35症候) を持った患者さん (模擬患者) に医療面接をして、的を絞った身体診察を行い、そこで得られた情報から、臨床推論を行い、鑑別診断や検査計画や治療方針を上級医 (この場合は評価者) にプレゼンテーションする。1受験者について3課題が出題される。

評価者：実施大学の教員 (医師) と、評価者認定のための講習会に出席して評価者資格を修得した他大学の教員 (医師) と臨床研修病院の指導医

2. 技能・態度の評価の基本

OSCE の場合は、課題により難易度が異なるため、日常診療において頻繁に遭遇する場面をシミュレートし、それについて適切に対応する能力を修得しているかどうかを評価する。

技能や態度の評価は、しばしば評価者による評価結果のばらつきが大きい。そこで、評価の客観性や妥当性を高めるために、評価に際し下記の5つが要点とされている。

- ① 評価者のレベルを一定にするための評価者養成
- ② 学外の人材による評価
- ③ OSCE の場合は、1ステーションあたりの評価者を複数にするか、ステーション数

を増やす

- ④ 評価のためのマニュアルを整備しておく。
- ⑤ 評価表についてはレーティングスケールやルーブリック等を用いて精緻な評価を行う。

3. Pre-CC OSCE と Post-CC OSCE における評価者

上記の 5 つのポイントを踏まえ、現在、当機構の OSCE における評価者の養成と評価の実際を述べる。

- 1) 評価者のレベルを保証するために、評価者養成のための講習会を実施し、そこで研修を受けた教員や指導医が評価を担当する。

Pre-CC OSCE では、医学部教員を対象に 52 回の評価者養成講習会を実施し、評価者数は 13000 人に達している。

Post-CC OSCE では、医学部教員（医師）と臨床研修病院の指導医を対象に 12 回の評価者養成講習会を実施し、現時点での評価者数は 749 名の養成が終了し、さらに年数回の評価者養成講習会を予定している。

- 2) 実施大学における学内のみでの評価者では客観性が確保できないため、自大学以外の教員や指導医が評価を担当する。

Pre-CC OSCE では、他大学から評価者資格を有する教員が実施大学に赴いて評価するシステムが構築されていて大学間のピア・レビューが行われている。

Post-CC OSCE 受験者が 6 年生であるため、評価者は評価者資格を有する他大学の教員（医師）と臨床研修病院の指導医も実施大学に赴いて評価する。

- 3) Pre,Post 共に 1 ステーションに 3 名の評価者による評価が行われている。また、1 人の受験生あたり、Pre では 6 課題、Post では 3 課題を受験する。
- 4) 評価マニュアルは、Pre,Post 共に整備されている。
- 5) 評価表に関しては、きわめて精緻な評価表が整備されている。